



目次 ● 巻頭コラム「旧安田楠雄邸庭園、百年目の耐震補強工事を終えました」
 仰木ひろみ(旧安田楠雄邸庭園 プロパティマネージャー)／展示報告／展示のお知らせ
 コレクション展「父と母～鷗外のファミリー・ヒストリー」／展示会場から／活動
 報告／ショップ便り／カフェ便り／地域情報／ボランティア活動ノート／これからの
 催しもの／編集後記

写真：

【右の段】(上)赤松家集合写真 明治21年 磐田市旧赤松家記念館提供 (中右)観潮楼庭にて 明治30年
 (中左)静男と潤三郎 明治27年 (下)観潮楼庭 家族と共に 明治30年
 【左の段】(上)荒木博臣、阿佐 年不詳 (中右)峰子と清子 明治36年 (中左)観潮楼縁先にて 明治39年
 (下)津和野より上京の頃 明治5年

旧安田楠雄邸庭園

百年目の耐震補強工事を終えました

仰木ひろみ (旧安田楠雄邸庭園 プロパティマネージャー)

邸外旧居が面している数下の道を根津から団子坂上へ。坂を突っ切って進むと、右手に区立の図書館。その少し先左手に特別養護老人ホーム「文京千駄木の郷」があります。この道も数下の道の続きです。この「文京千駄木の郷」の2軒隣に、大きな古い木の門があります。門の奥に見える和風の邸宅が「旧安田楠雄邸庭園」です。

「豊島園」を作った藤田好三郎氏が正8(1919)年に自邸として建てたもので、大正12年まで住まれていました。関東大震災後に安田善次郎の娘婿、善四郎氏が譲り受け、ご家族で住み続けてこられ、善四郎氏の長男楠雄氏の夫人が平成7年まで住んでおられました。

私が仲間2人と作っていた地域雑誌「谷中・根津・千駄木」が地元建築家と安田邸を訪ねたのはその頃です。初めてお会いした夫人から、前年にご主人の楠雄さんが亡くなられたが、この家を何とか残せないかというご相談を受けました。

私たちは早速、古い建物が好きな仲間間に声をかけ、どうしたら残せるだろうか、何かに活用して残せる案はないか、まずは地域の皆さんに知ってもらわなければと、一日限りでしたが公開をしました。大きな門があいていたのは知っていたけれど、中がこんなに広かったとは、と訪れた誰もが驚きました。

そこから話はどんどん進み、公益財団法人日本ナショナルトラストに寄贈していただくことになりました。

都心の山の手住宅は震災や戦災で多くが失われてしまいましたので、その中にあって建物と庭園が一体化して現存する貴重な文化財ということで、平成10(1998)年には東京都の指定名勝「旧安田楠雄邸庭園」となりました。



その後、日本ナショナルトラストは東京にあるプロパティとしてどうするか、保存修理委員会を立ち上げ、調査、修理が平成17年まで行われました。平成19(2007)年から水曜と土曜日に一般公開を開始。これにあたっては、一日公開した日に立ち上げた会「文京歴史の建物の活用を考える会」(たてもん応援団)が、維持管理を担い、市民ボランティアが公開とともに、イベントや庭の落ち葉掃き、邸内の掃除も行っていました。

続いて庭園の修理工事が平成22(2010)年から4年かけて行われ、やっとこれで終わりかと思いましたが、大きな問題が残っておりまして。それが耐震補強工事です。東西に長い敷地で、玄関のある東棟は平屋ですが、中央棟は二階建てで、南側の庭に面して、ガラス戸が続いています。大きな地震が来て、邸内にいる人たちに何かが起こってからは遅すぎます。この度、本年10月までの1年2か月をかけて工事が行われ、11月9日土曜日に再公開が開始しました。



今回の耐震目標としては、ごくまれに起こる震度6強から7程度の地震が発生した場合でもすぐに倒壊せず、邸内にいる人が安全に避難できるようにすることが一番の目的です。

また、耐震工事はできるだけ物理的に見えない箇所での工法とする。もとの部材の切断、取り換えは可能な限り行わない。とくに庭園に面した開口部については可能な限り新設物は設けない。など補強の方針を掲げ、東洋大学理工学部建築学科の松野浩一先生が提案した杉板を複数重ね合わせた耐力壁をビスや釘止めする方法がとられました。

11月10日には耐震募金をしてください。方々をご招待して落語会が行われました。安田邸の金屏風の前の落語に、大勢の人が安心して笑うことができました。100歳の安田邸は耐力壁をいれて、建物内部がきりっとしたように感じます。どうぞ、森鷗外記念館の帰りに、お出でください。相互割引ができますので、入館券を見せていただいた方は2割引引き400円にて、ご入館いただけます。

旧安田楠雄邸庭園

東京都文京区 千駄木5-20-18
TEL: 03-3822-2699 (公開日のみ)

- 一般公開日時 ●
毎週水曜日・土曜日 10:30~16:00
(夏季休館・冬季休館あり)
- 邸内ガイドツアー ●
10:30~15:00まで30分ごと
(ただし12:30の回はなし)
- 入館料 ●
一般: 500円
中高生: 200円
小学生以下: 無料
障がい者(手帳提示): 無料

展示報告

特別展

「荷風生誕140年・没後60年記念 永井荷風と鷗外」

会期: 2019年10月12日(土)~2020年1月13日(月・祝)

永井荷風(1879~1959)は、東京市小石川区(現・文京区春日)に生まれた、文京区ゆかりの文化人です。明治、大正、昭和と三つの時代に渡って活躍した荷風が、文学上の師と敬愛したのは明治の文豪・森鷗外(1862~1922)でした。鷗外もまた、自分より17歳若い荷風の實力を認め、慶應義塾大学文学部の教授に推薦し、荷風が主宰する雑誌「三田文学」の刊行を後押ししました。

本展は、荷風と鷗外の接点や交流、鷗外を敬慕し続ける荷風について注目する初めての展示会でした。書簡や自筆資料(「鷗外日記」「断腸亭日乗」)を中心に、〈その一〉はじめての出会い(「その二 海外での体験」)〈その三 荷風と鷗外の「三田文学」〉〈その四 鷗外を再読する〉〈その五 鷗外への敬慕〉の五部構成で迎えました。

小さな誌面ですが、荷風がその感激を後に述懐した(書かでもの記「大正7年」)初対面の日を特定できるばかりでなく、尾崎紅葉率いる硯友社、与謝野寛の東京新詩社、巖谷小波らの木曜会など同席した人々も確認できました。〈その二〉では、荷風の留学と帰国後の鷗外との再会を紹介しました。パリで出会った英文学者・上田敏のすすめで、帰国後に初めて観劇機「鷗外自邸・現当館」を訪れた後、鷗外に送ったお礼の絵葉書(明治41年11月22日消印)は、現在残る数少ない二人の交信資料です。〈その三〉は、「三田文学」での共演。特に荷風を慶應義塾大学部へ推薦する鷗外の動き、「三田文学」創刊までの流れと荷風が編集を担当した時期(創刊、大正5年2月)に「三田文学」に収録された荷風と鷗外の作品を一覧表にしました。〈その四〉は、鷗外没後に鷗外作品を再読する荷風を辿りました。「断腸亭日乗」には、読んだ鷗外作品や感想がたびたび記されています。

『渡江抽斎』などの鷗外史伝を通読することが、荷風の新しい試みである『下谷叢話』の執筆につながりました。荷風の鷗外再読は晩年まで続きます。〈その五〉では、鷗外を敬慕し続ける晩年の荷風を、当館の前身である文京区立鷗外記念本郷図書館の開館に至るまでとあわせて追いました。戦後の荷風と鷗外家族との書簡や、荷風最後の鷗外論「鷗外記念館のこと」の下書きが収録された「創作ノート」など、展示会初出品を含む貴重な資料を展示することができました。

出品資料で特に報告したいのは、「二冊の荷風旧蔵本と自筆原稿『再会』」についてです。荷風の初版本の中でも、出荷直前に発禁処分を受けた『ふらんす物語』は、群を抜いた貴重本です。押収を逃れた少数数のみが発見するといわれていますが、本展では革装の荷風旧蔵本という究極の一冊を展示することができました。また、あわせて『ふらんす物語』所収作品の自筆原稿『再会』も出品いただきました。今回あらためて確認されたのが、荷風旧蔵本の『あめりか物語』です。『あめりか物語』は、荷風が帰国した翌月に刊行され、好評を得た作品です。荷風は、『ふらんす物語』と揃いの革装が施されたものを持っていったことがわかり、並べて展示しました。アメリカ、フランス滞在中に執筆した作品集『あめりか物語』、フランス滞在中や帰国船内、帰国後の執筆を収めた『ふらんす物語』。海外体験によって生まれた作品を、荷風がいかに大切にしていたのか、想像に難くありません。この二冊の荷風旧蔵本が並んだのは、荷風没後以来とも言われています。まさに、奇跡の「再会」がここに実現しました。

荷風と鷗外は直接の師弟関係ではありませんが、生涯にわたって鷗外を見つめ読み続けた荷風の姿は、偉大な師を慕う弟子そのものです。粋で飄々として……と魅力的な生き方が注目されることの多い荷風ですが、本展では鷗外と鷗外作品と、つまりは文芸と実直に向き合う「文人・永井荷風」をご覧ください。

会期中に左記のイベントを開催いたしました。

- ◆ 展示関連講演会「鷗外と荷風をつなぐもの」
講師: 中島国彦氏(早稲田大学名誉教授)
日時: 11月24日(日) 14時~15時30分
- ◆ 展示関連講演会「生涯鷗外を敬愛した荷風」
講師: 川本三郎氏(作家、評論家)
日時: 12月14日(土) 14時~15時30分

◆ 佐藤基撮影



◆ 導入展示室
タイトルと肖像写真のバナーは撮影可能とし、荷風と鷗外と記念撮影が好評でした。



展示室1



展示室2
鷗外考案の『東京方眼図』を床に敷き、明治の東京を散歩するイメージをつくった。



奇跡の再会
左から荷風旧蔵の『あめりか物語』(日本近代文学館蔵)と『ふらんす物語』(個人蔵)



荷風愛用の傘と下駄(永井仕一郎氏蔵)

展示のお知らせ

コレクション展
父と母

鷗外のファミリー・ヒストリー

森鷗外(陸軍軍医、作家。本名、林太郎)は文久2(1862)年1月19日、石見国津和野藩(現在の島根県津和野町)に生まれました。父は静男、母は峰子、森家は藩主の典医をしていました。

遠戚・西周(哲学者)が静男に宛てた、鷗外と赤松登志子との結婚式に関する明治22(1889)年2月の書簡があります。書中には、赤松則良(海軍中将)の夫人・貞娘、登志子、周夫人・升子、貞の父・林洞海(医師)らが登場します。本展ではこうした館蔵資料を通して、鷗外の父母とその人物交流をたどりま。

そして、鷗外を思わせる「博士」とその父母が登場する小説「カズイスタカ」(明治44年)、「本家分家」(大正4年)から鷗外の父母像をひもときます。さらに、歴史小説「山椒大夫」最後の一句(いずれも大正4年)、翻訳戯曲「街の子」(明治44年)など親子関係が見える作品を紹介いたします。

鷗外の父と母や作品を追跡する、ファミリー・ヒストリーをお楽しみください。

会期●2020年

1月18日(土)～4月5日(日)

【会期中の休館日】

1月28日(火)、2月25日(火)、26日(水)、3月24日(火)

会場●文京区立森鷗外記念館 展示室2

開館時間●10時～18時

(最終入館は開館30分前)

観覧料●一般300円

(20名以上の団体・2400円)

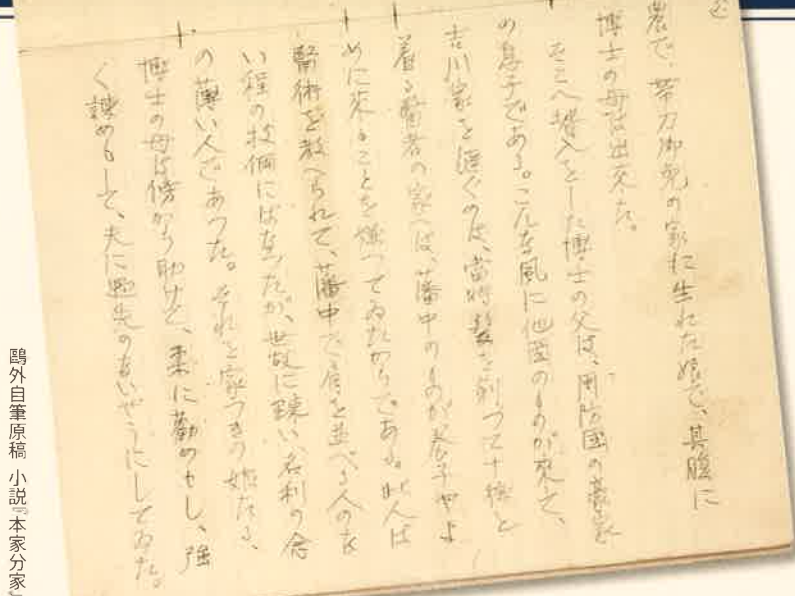
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料

※文章ふるさと歴史館入館券、パンフレット印刷入、友の会会員証ご提示で2割引

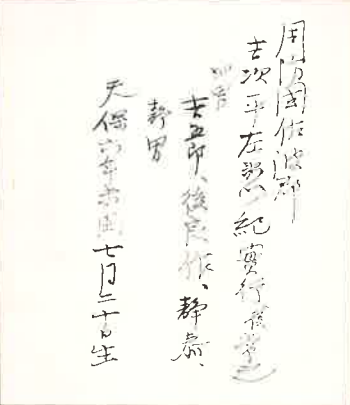
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

※この他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

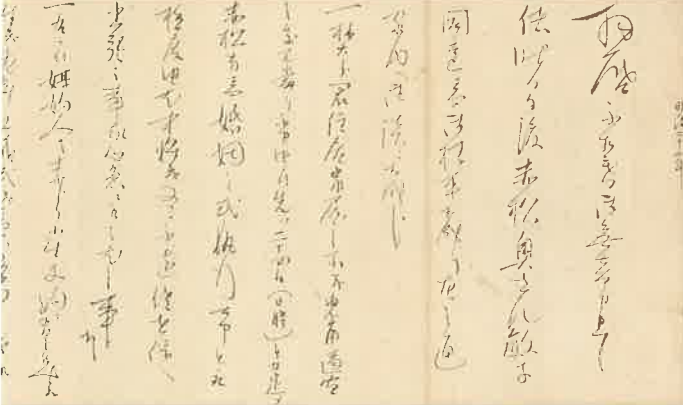
鷗外自筆原稿 小説「本家分家」



「三田文書」2巻2号(明治44年2月) 小説「カズイスタカ」収録



鷗外自筆「森静男改名覚書」 父・静男の名を覚え書きしたものの



西周筆 森静男宛書簡 明治22年2月2日不詳 鷗外と赤松登志子の結婚式に関する書簡

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

「父性」としての峰子

講師 小仲信孝氏(跡見学園女子大学教授)
日時 2月24日(月・振休) 14時～15時30分
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料(参加費と本展の観覧券(半券可)が必要) 申込締切 2月10日(日) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
1月29日、2月19日
いずれも水曜日14時～(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)

学生ボランティアによるギャラリートーク

展示室にて文京区内大学の有志が展示解説を行います。
3月1日(日) 11時～14時(各回30分程度)
申込不要(高校生以上の方は、展示観覧券が必要です)

同時開催

コレクション展開催中に、左記コーナー展示を開催します(展示室1)。展示観覧券で、コレクション展と共にご覧いただけます。

「鷗外と石川啄木」

2019年、文京区が岩手県盛岡市と友好都市提携を結んだことを記念し、ゆかりの文学者・石川啄木と鷗外の交流を紹介いたします。

展示期間

2020年1月18日(土)～4月5日(日)の開館日
鷗外158回目の誕生日を記念して、2020年1月19日(日)は、無料で展覧会をご覧ください。

鷗外誕生日記念行事

展示会場から

三宅花圃筆 原富貴宛書簡

大正7年1月6日消印(部分) [A07015]

歌人・三宅花圃(本名・龍子)から、原富貴に宛てた結婚のお祝いを伝える書簡です。花圃は、明治21年に坪内逍遙の校閲を受けた小説「秋の舎」を発行し話題となった小説家です。和歌を中島歌子の「秋の舎」に学び、明治27年に許されて歌の門を開きました。富貴はその門下にあった女性で、森於菟(鷗外の長男)と結婚しました。この書簡の3日後の1月9日、二人の結婚披露宴が行われました。

この書簡の中で、花圃は自らと森家、赤松家との縁を三つ記しています。

於菟は赤松家長女・登志子と鷗外の間生まれた子どもでした。花圃の生家・田辺家と赤松家は「別懸」(特別に親しいこと)にしており、花圃は登志子をよく知っていました。「於菟さんの事もいつも～事につけ承知」していたと言います。

花圃と、於菟の叔母・小金井喜美子(鷗外の妹)は、東京高等女学校(現・お茶の水女子大学附属高等女学校)を卒業した「同窓の友」でした。加えて、登志子のすぐ下の妹・土子登久子も同窓生だったと言います。

登久子の娘たちは、花圃のもとに土曜日(歌の会と思われる)に通う人々でした。

於菟によると、この縁談は鷗外が妹の喜美子に依頼したものでした。喜美子の友であった花圃とその夫・雪嶺が花圃の門下にあった富貴をすすめ、歌人・佐佐木信綱の推奨もあって決まったのです。

花圃にとって、富貴と於菟の「縁組」は、いろいろの因縁より感慨無量でした。森家に嫁ぎ苦勞もするであろう弟子に、祝いの言葉とともに「実に～不数御縁の出」を伝え、今後も皆で見守っていることを伝えたかったのかもしれない。

この書簡は、コレクション展「父と母」鷗外のファミリー・ヒストリー」に展示します。

参考文献:「観潮楼始末記」(森鷗外著 森徳社 昭和21年7月収録)、「三宅花圃」(近代文学研究叢書51巻 昭和女子大学近代文学研究部刊 昭和55年11月)、「鷗外日記」(鷗外全集35巻 岩波書店 平成元年10月)ほか

石川啄木筆 鷗外宛書簡

明治41年5月7日付(部分) [A03003]

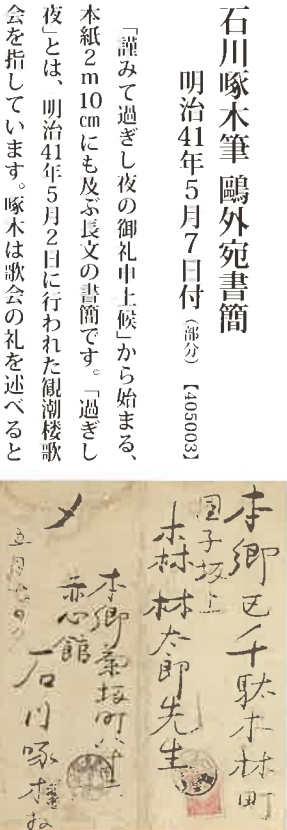
「謹みて過ぎし夜の御礼中上候」から始まる、本紙2m10cmにも及ぶ長文の書簡です。「過ぎし夜」とは、明治41年5月2日に行われた観潮楼歌会を指しています。啄木は歌会の礼を述べるとともに、単身上京した身の上を鷗外に伝えています。

若くから文学を志しながら活路を開けないでいた啄木は、これまでも上京と帰郷を繰り返していました。啄木は、文学を「生きて行く上の(中略)唯一つの生活の方法」と考え、「いかにしても今一度、是非に今一度、東京に出て自らの文学的運命を極度まで試験せねば」と、並々ならぬ覚悟で上京を決めます。明治41年4月24日に自宅のある函館を発し、同月28日に自らが所属する短詩会結社・東京新詩社(主宰の与謝野寛宅を訪問。5月2日、寛に連れられて初めて参加したのが、鷗外の主宰する観潮楼歌会でした。

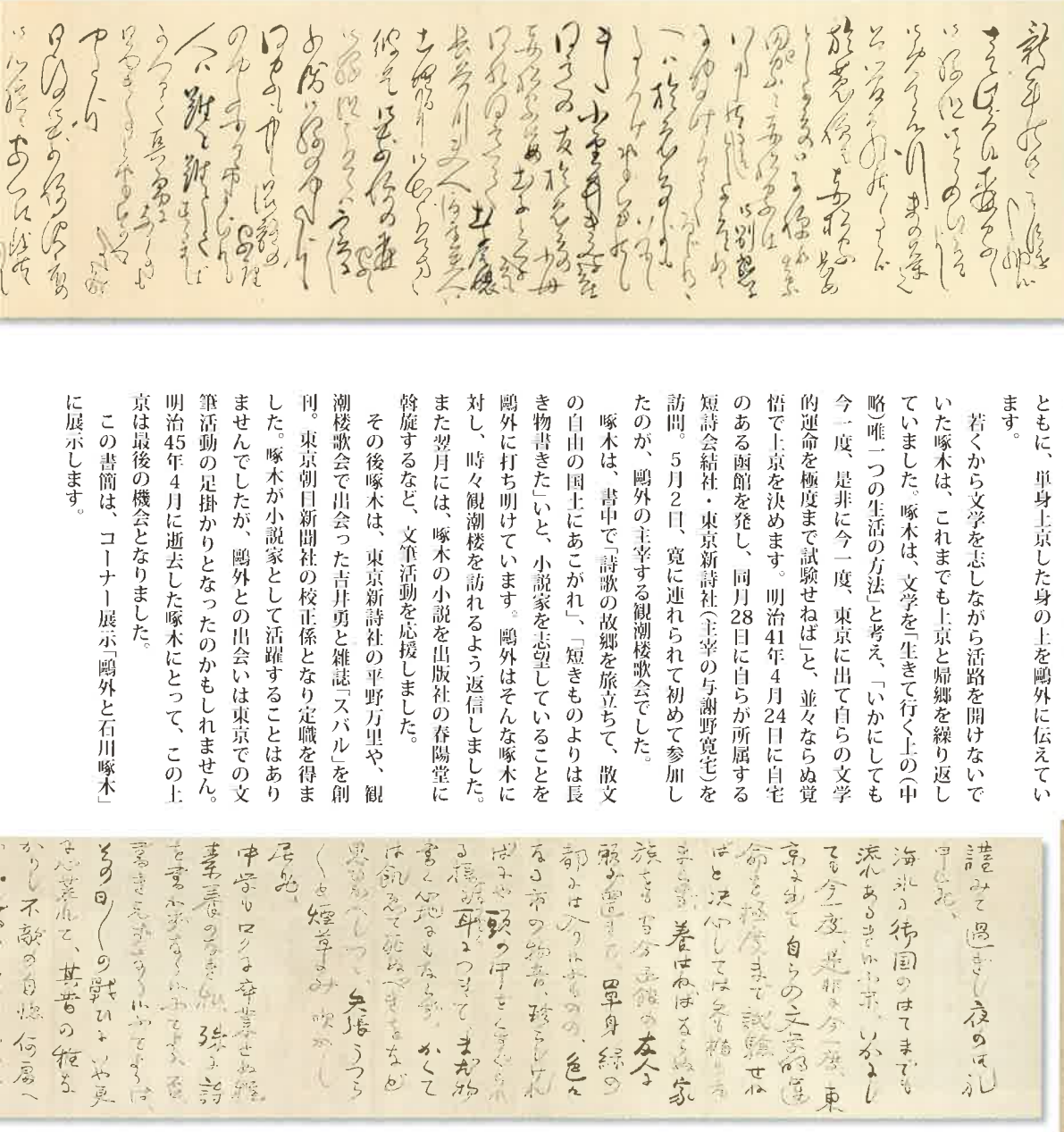
啄木は、書中で「詩歌の故郷を旅立ちて、散文の自由の国土にあこがれ」、「短きものよりは長き物書きたい」と、小説家を志望していることを鷗外に打ち明けています。鷗外はそんな啄木に対し、時々観潮楼を訪れるよう返信しました。また翌月には、啄木の小説を出版社の春陽堂に斡旋するなど、文筆活動を応援しました。

その後啄木は、東京新詩社の平野万里や、観潮楼歌会で出会った吉井勇と雑誌「スバル」を創刊。東京朝日新聞社の校正係となり定職を得ました。啄木が小説家として活躍することはありませんでしたが、鷗外との出会いは東京での文筆活動の足掛かりとなったのかもしれない。明治45年4月に逝去した啄木にとって、この上京は最後の機会となりました。

この書簡は、コーナー展示「鷗外と石川啄木」に展示します。



石川啄木筆 鷗外宛書簡



西周筆 森静男宛書簡 明治22年2月2日不詳 鷗外と赤松登志子の結婚式に関する書簡

活動報告

「こどもてつがく」開催

9月8日、当館では初開催の「こどもてつがく」に、小学1年生から6年生までの子どもたちが集まってくれました。ファシリテーターの蒔池依里氏が鷗外の短編作品『杯』を音読し、子どもたちは疑問に思った箇所や登場人物と違う考えをもった箇所をワークシートに書きこんでいきます。そのなかから全員でテーマをひとつ決めて対話を進めていきます。対話には「話しをする人は毛糸でできたボール(コミュニケーションボール)を持つ」「人が話している時は聞く」「自分が思っていることをきちんと言う」「人が嫌だと思うことは言わない」「話しをしなくても良い」といういくつかのルールがあります。子どもたちはこれらのルールを守って、初めて「こどもてつがく」の対話を楽しんでいました。



9月・10月のふみの日イベント

「感謝と喜びを伝える『笑い文字』」
「ありがとうを送ろう」

毎月23日に開催している当館のふみの日イベント。9月と10月のふみの日は、笑い文字普及協会の代表理事・廣江まさみ氏をお招きし『笑い文字』の講座を開催しました。講座では今朝起きてからこの会場に来る

までに何回
ありがとう
を言いまし
たかとの先
生の問いか
けから始ま
り、「ありが
とう」と言葉
にして伝え
ることの大
切さを学びました。『笑い文字』は、文字と



満面の笑顔を筆文字で書き、思いを相手に伝えるコミュニケーションツールです。親子や兄弟、夫婦など、関係が近いほど恥ずかしさからなかなか言えない言葉もあります。『笑い文字』ならば、そんな思いも素直に伝えられそうです。今回の2回講座では、全員で「ありがとう」の笑い文字を書き、「書いて半分、渡して完成」の講座のキーワードに伴い実行しました。

鎌倉文学散歩

「長谷から鎌倉文学館へ」

10月23日、大妻女子大学教授の須田喜代次氏にご同行いただき、鎌倉文学散歩を楽しみました。午前中は、鎌倉文学館山田芸員の解説で長谷周辺の寺院を散策。江ノ電・極楽寺駅近くの成就院からは秋の海を臨むことができた。須田氏を囲んで



の、海の幸の昼食後は鎌倉文学館へ。「鷗外が伝えたかったこと」「文学を学ぶ意義」など実り多い須田氏の講演や、鎌倉文学館小田島副館長からは同館の歴史、鎌倉ゆかりの文人についてお話しいただきました。日本晴れの美しい湘南の空と海、そして庭園の秋バラもカメラにおさめることができました。「鎌倉は何度も訪れていますが、初めて行った社寺が多く勉強になりました」「解説つきの散歩は楽しいですね」などの声もいただきました。来年度の文学散歩もどうぞお楽しみに！

ドイツ連邦共和国大統領夫人

エルケ・ビューデンペンダー氏が
来館

10月23日、ドイツ連邦共和国大統領夫人エルケ・ビューデンペンダー氏が来館されました。天皇陛下即位の儀へご参列のため来日された大統領夫人は、大変お忙しいスケジュールの中、当館への来館をご計画ください。当日は晴天に恵まれたこと、日本の秋晴れを喜んでおられ、終始満面の笑顔でお過ごしいました。



展示会場では、鷗外の一生を鑑賞。鷗外がドイツ留学で学んだ数多くの足跡をご覧になり、ドイツとの関係を大変丁寧に観察され、特に留学中のドイツ婦人会への参加や女性作家への鷗外の思いに、関心を寄せられていました。



第二展示室の東京方眼図(特別展「永井荷風と鷗外」に伴い設置)を鑑賞した際、観潮には、観潮楼(現・当館)や皇居などの位置を細かく確認され、今回の来日と鷗外が繋いだドイツとの縁を重ね合わせておられました。展示会鑑賞後は、日本を代表する先生方、ジャーナリスト、作家の皆様を交えたディスカッションも行われ活発な意見が交わされました。

鷗外が残した両国の繋がりを大切にしましょうと、大銀杏を見上げながら語りかけるようにお話しされたビューデンペンダー大統領夫人。その美しい眼差しが印象に残っています。



左から、当館館長高橋、青木奈緒氏、岩波敦子氏、エルケ・ビューデンペンダー氏、坂東眞理子氏、国谷裕子氏



ショップ便り

ミュージアムショップには一筆箋が再入荷しました。これまで販売していた2種の一筆箋(ゲンゲ、みみずく)をモチーフとしたものに、新たな3種のデザインが加わりました。

一つは雑誌『スバル』創刊号に掲載された、四人の画家が描いた鷗外のカリカチュアをモチーフにしたものです。このモチーフは、当館のポストカードにも使用されています。もう一つは、鷗外の詠んだ詩『沙羅の木』をモチーフとしたものです。『沙羅の木』は後に、鷗外の長男・於菟が永井荷風に揮毫を依頼し、詩碑として建設されました。今回はその碑文を、実際の沙羅の木(ナツツバキ)の花の写真と重ねてデザインしました。最後の一つは、集合写真を使った一筆箋です。与謝野寛の渡欧のための送別会に、鷗外が参加した時に撮られた集合写真です。この会には荷風や、名だたる文人たちが出席しました。裏面に出席者の名前が書かれていますので確認してみてください。



一筆箋 350円(税込)

縦書き、横書きとバリエーション豊かな一筆箋から、お気に入りを探してください。



カフェ便り



ショコラとクロワッサン 550円(税込)

10月から始まった特別展「永井荷風と鷗外に合わせた」カフェでは限定メニュー「ショコラとクロワッサン」が始まりました。荷風の『断腸亭日乗』に「一碗のショコラを啜り、一片のクロワッサン(三日月形のパン)を食し、昨夜読残の疑雨集をよむ」とあります。荷風お気に入りの朝食のひとつだったという組み合わせを、そのままメニューにしました。クロワッサンは、浜町にあるドイツパンの店「タンネ」のもので、牛乳だけで作った砂糖を入れていないショコラには、鷗外生誕の地・津和野でとれたハチミツを添えて、お好みで甘みを加えることができるようになっていきます。展示会と一緒に楽しみたいと思います。

また、これまでの深煎りコーヒーに加えて、浅煎りコーヒーを始めました。苦味が少なく酸味が強いのが特徴です。その都度、旬の浅煎り豆を仕入れています。浅煎りコーヒーは「今日のコーヒー」として販売しています。なくなり次第新しい浅煎り豆に変わります。一期一会の味をお楽しみください。

地域情報

講道館 鏡開式

2020年1月12日(日)

講道館は、嘉納治五郎(万延元年〜昭和13年)が明治15年に創立した、講道館柔道の総本山です。創立以降、幾度かの移転を経て、昭和33年から現在の文京区春日1丁目に立地しています。

講道館では毎年1月、鏡開式が行われます。講道館の鏡開式は既に明治期から知られており、当時は門下生たちが餅を持ち寄っていました。現在は形の演武、有段者による乱取、昇段証授与が行われたのちに、一般の参加も可能な「おしるこ会」が開催されています。

嘉納は、明治42年に東洋人で初めてIOC(国際オリンピック委員会)委員となり、昭和15年の幻の東京オリンピックの招致を成功させたことでも知られています(後に返上)。令和2年はいよいよ東京オリンピック開催の年。「日本スポーツの父」とも称される嘉納ゆかりの施設の鏡開式に参加して、オリンピックでの日本選手の活躍を祈願してみませんか。



鏡開式でお汁粉を食す嘉納(写真中央)
(歴史写真191号、昭和4年3月より
文京ふるさと歴史館蔵)

ボランティア活動ノート

この秋新たに、解説ボランティアが4名加わりました。

5月から3ヶ月にわたる鷗外講座受講に始まり、先輩ボランティアによるレクチャー、学芸員によるレクチャーを経て、半年間の長い研修期間が終了し、10月より正式に活動が始まりました。



研修の様子

当館の館内案内は、庭を周ってのち展示室を巡ります。庭の存在を知らない方もいらつしやるため、参加者の方に喜ばれることが多くあります。庭にも見所がいくつかあるので、ぜひ館内案内に参加されることをお勧めします。

また、当館では開館当初から活動している解説ボランティアも多くなります。ベテランの方から新人の方まで、それぞれ違う個性を持って解説しています。同じ展示でも解説ボランティアによって新しい視点で楽しめるかもしれません。

解説ボランティアによる館内案内は、土日祝の13時と15時に行っています。

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。日程・講師・内容を変更する場合があります。

1月11日(土) 14:00～15:30
鷗外誕生日 記念講演会「死を生きた人びと」
講師：小堀鷗一郎氏(新座市堀ノ内病院訪問診療医) 会場：講座室 料金：1500円 定員：50名 申込締切：12月27日(金)必着
1月19日(日) 10:00～18:00
鷗外誕生日記念イベント 無料観覧日◎
1月19日は森鷗外の158回目の誕生日です。誕生日を記念して無料で展覧会を観覧いただけます。
2月24日(月・振休) 14:00～15:30
展示関連講演会「〈父性〉としての峰子」
講師：小仲信孝氏(跡見学園女子大学教授) 会場：講座室 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可) 定員：50名 申込締切：2月10日(月)必着
3月7日(土) 14:00～16:00
朗読会「森鷗外の漢詩をご一緒に」
朗読：加賀美幸子氏(アナウンサー) 解説：佐藤保氏(二松學舎大学・お茶の水女子大学名誉教授) 会場：文京シビックセンター 26階 スカイホール 料金：2500円 定員：90名 申込締切：2月25日(火)必着 鷗外が生涯にわたり遺した多くの漢詩を、佐藤氏の解説と加賀美氏の朗読でお楽しみいただけます。

1月19日(日) 11:00～11:30 / 13:30～14:00
鷗外誕生日記念イベント 「ライアーによるバースデーコンサート」◎
演奏：三野友子氏(ライアー奏者) 会場：エントランス 料金：無料 鷗外の誕生日に、ライアー(ミニ堅琴)のコンサートをお楽しみください。
1月23日(木) 11:00～17:00
文の京ワークショップ/ふみの日イベント 「自由な形で書くラブレター」◎
会場：エントランス 料金：無料 友人、恋人、家族、気になる人に、自由にラブレターを書いてみましょう。
1月23日(木) 15:00～17:00～
文の京ワークショップ/ふみの日イベント 朗読会「耳で聞く愛の言葉」◎
朗読：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：モリキネカフェ 料金：無料(ワンドリンク注文願います) 定員：10名程度(当日先着順) バレンタインデーを前に、「愛」をテーマにした詩の朗読会を開催します。
2月23日(日・祝)～3月8日(日) 11:00～17:00
文の京ワークショップ/ふみの日イベント 「手紙にまつわるブックフェア」◎
会場：エントランス 料金：無料 「手紙」にまつわる書籍を集めたブックフェアです。
3月23日(月) 11:00～17:00
文の京ワークショップ/ふみの日イベント 「扇面用紙に手紙をしたためる」◎
会場：エントランス 料金：無料 扇面用紙に、文字や文章、好きな絵を描きましょう。

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき** 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係まで応募ください。※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール** 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご連絡ください。※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

編集後記

今年、平成から令和へと大きく時代の動いた年で、改元に関するおもな儀式を振り返ると、4月30日の退位礼正殿の儀を始めとし、即位後朝見の儀、即位礼正殿の儀、祝賀御列の儀、大嘗宮の儀、饗宴の儀などがありました。

本誌27、28号で紹介の通り、鷗外は大正4年11月に京都で行われた大正天皇即位大礼に出席し、即位礼正殿の儀や饗宴の儀などの様子を『盛儀私記』と題して発表しました。また皇室博物館総長兼図書頭に就任後には、歴代天皇の諡や元号の考証を行いました。当館では令和への改元を契機として、常設コーナーの一部に「図書頭としての業績」(4月6日～10月6日)や「鷗外が見た大正即位の大礼」(10月12日～令和2年1月13日)のテーマを設け、関連資料を展示しました。常設コーナーは、展覧会が変わるごとに資料の展示替えを行っています。展覧会企画に関連する資料や、時勢に合わせた資料を展示することもあります。ご来館の際には、常設コーナーもお見逃しなく!

交通案内

●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- ・JR線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「回子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4次曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等



文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum